

Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

「人間愛」と「感謝」の気持ちに基づいて

④2 水戸中央病院 (茨城県水戸市)



緑に囲まれ、300台収容の駐車場も設けられた

JR水戸駅から車で約15分、百合が丘ニュータウンに隣接する高台にある水戸中央病院。地下1階、地上6階建てで、病床数は178床、18の診療科をそろえ、24時間救急対応している。

医師不足の中、地域の医療機関と連携。「肺がんなど特定の分野では、ほかの地域基幹病院と補完し合って地域の医療を支えています」と法人本部広報・渉外部長の眞辺匡氏。地域医療連携室では医療に関することだけでなく、患者の悩みや経済上の問題などにも対応している。

水戸市もほかの地方都市と同様に、地域住民

が高齢化しており、同病院も透析やリハビリテーションなど高齢者医療のニーズが高い。「思いやりと愛のある医療をめざし、感謝の気持ちをもって仕事にあたります」という病院の理念はお題目ではない。小野陸・理事長兼院長は「ほかの医療機関が対応できないような患者さんも受け入れに努めています」と言う。

駅南(下市)地区にあった病院の老朽化や手狭となった駐車場問題の解決のため、この地に新築移転して6年目を迎えるが、水戸中央クリニックや笠間中央クリニックなど関連施設を含めて、患者



地元の書家、會沢小伯氏の書が掲げられたロビー

医療・介護・福祉・社会保障全般の相談を受け付けている地域医療連携室



高齢者にも分かりやすいように、番号と大きな文字で表示した案内板



スタップステーションから目が届く位置に設けられた食堂・談話室(奥)



掲示物を排し、ギャラリーのようなライトアップを施した廊下



5月の3日間で約700人が訪れた看護デー

や家族に病院の姿勢が評価されてきたことを多くのスタッフが実感している。

院内に入ると、ロビーの吹き抜けに掲げられた、地元書家の大きな作品が目飛び込んでくる。しかし、それ以外は、ほかの病院で目にするような絵画や写真のたぐいはほとんど掲示されていない。院内は、白を基調としたシンプルなデザイン。天井のライトは壁を照らし、まるでギャラリーのような雰囲気を出している。

待合室の緑色のいすは、背もたれにバネが入っており、座り心地がいい。

医療の啓発活動にも力を入れている。患者や家族、地域住民を対象に、外部の講師を招いた年数回の医療講演会や、1期9回の糖尿病教室を年2回開催し、多くの人が参加している。毎年5月に開催する「看護デー」と称したイベントも好評だ。

『水戸中央病院40周年記念誌』には、院内のイベントや職員たちの写真も数多く掲載され、職員を大事にしてきた歴史がうかがえる。東日本大震災以降、県内が震源地となる地震が続いているが、「何が起きても我々には団結力があります」と事務部医事課長の成石敏明氏は笑顔で応えた。

ワールドクラス
東京に見合った「世界級病院」を志向

④ 大崎病院東京ハートセンター (東京都品川区)



1階フロント。受け付けと会計を処理する。全国紙がラックに置かれている。左手の絵画作品は南淵氏が寄贈したもの

「病院の宝は何といっても人材です」南淵明宏・センター長の開口一番。大崎病院東京ハートセンターを2010年の就任以来、牽引する。循環器、とりわけ心臓に特化した専門病院。手術室・カテーテル室をそれぞれ2つ、ICUが14床という設備を誇る。薬剤師には「担当制」を採用。医師同様に患者につく。栄養科の要望で食器に陶器を使用。好評を博している。「一歩病院に入ると安心した」——そんな患者の声も聞かれる。今や遠く北海道や沖縄県からも患者を受け入れる「全国区」となった。

病院完成は05年12月。間もなく丸6年を迎える。もともとは民間企業が社員寮を取り壊し、駐車場として利用していた土地。「公共性の高さ」を条件に売却先を探していた。立地する御殿山地区は東京・北品川に広がる住宅地域。地名は徳川家康が江戸初期、江戸湾を見下ろす御殿を建てたことに由来する。幕末には英国をはじめ諸外国の公使館があった。JR山手線と東京臨海高速鉄道が乗り入れる大崎駅から徒歩数分。大半の患者は電車で訪れる。交通は至便。従来は閑静な周辺環境の中にある。



玄関。右手は病院が所有する救急車。遠方からの患者を羽田空港まで迎えに行くことも

5階テラス。スタッフたちがくつろぐ場。周囲を取り巻くのは高層マンションやシティホテル



4階ラウンジ。患者や家族が談話したり、食事を楽しんだりする



3階中庭。3階から5階までは中庭を囲む回廊形式の造りになっている



2階は「病院のエンジン部分」(南淵氏)。写真のICUと手術室・カテーテル室など各部は完全に一体化



1階廊下。診察室や処置室、CT室などが配してある

だが、現在はやや事情が異なる。

「再開発の真っ最中。周辺には140mを超えるオフィスビルやマンションが建ち、飲食街や高級スーパーもでき、道路も拡幅。だいぶ様変わりするでしょう」(峯一彦・事務長代理)

病院は右肩上がりの成長のさなかにある。「許可病床は100床。フルに使ってお迎えできるように今、準備をしている段階」(同前)

将来に向けての気宇は壮大だ。鍵は病院の名前にある。「東京」から「世界」を志向する。

「我々が中心となり、アジアにおける心臓医療の

トップを目指したい」(同前)

「世界中の誰もが知っている都市・東京の心臓外科部門に、サッカーで例えればワールドカップの決勝トーナメントに出場可能な病院が皆無。国辱的な状況とっていい」(南淵氏)

年間症例数でいえば、「閑散としている」(同前)のが山手線圏内の現状だ。5年をめどに年間1000件の手術をこなすのが目標。

「北京やクアラルンプールの病院に伍していく。これだけの設備を与えられて実現できなければ、僕は偽物だということです」(同前)